

5 岩津ネギの施肥改善によるさび病回避

ねらいと成果

岩津ネギは、秋の収穫時期にさび病が多発し外観品質が低下することが問題となっている。そこで、正常なネギの生育を確保し、さび病の発生を軽減するための適正な施肥体系を検討した。

その結果、初期の肥料施用量の低減と生育後半期の窒素成分欠乏回避が有効であり、堆肥及び基肥施用量を減じ追肥時期を早めることが重要と思われ、施肥量は慣行の30%減肥が可能である。

内容

堆肥施用量を0、2、4、8 t/10a、肥料はCDUS682追肥3回、全窒素成分量30kg/10aとしてコンテナ栽培した。その結果、施用量が増すほどネギの生育が促進され、さび病発生は少ない傾向であった。

窒素形態と施用量は、マサ土：パーライト等量混合土を詰めたワグネルポットで硝酸態（硝酸石灰）、アンモニア態（硫安）、全窒素成分量を10、20、30、40、50kg/10aとして栽培した（図1）。その結果、アンモニア態及び硝酸態肥料とも施用量が増すほど生育が促進され、発病は多くなる傾向であった。

慣行露地栽培における窒素の形態と施肥量は、硝酸態主体、同30%減肥、アンモニア態主体、同30%減肥、特別栽培（有機質肥料）とし、減肥区以外は慣行の窒素成分量47.2kg/10aとした。その結果、基肥施用後著しくECが高まったが、生育後半期の硝酸及びアンモニア態窒素はおおむね適正範囲であり、収穫時の草丈、調整重などに差異はなかった。

ネギ体内の窒素成分含量は、食品成分表に示されている葉ネギの含有率と比較すると露地栽培では全

体的に含有量が多く、さび病の発病程度は低く窒素栄養と発病との関連が大きいと推定される（図2）。

以上から、岩津ネギの施肥改善は、土壌pHを上げるような堆肥の多量施用は避け4 t/10aまでとする。生育最盛期の硝酸態+アンモニア態窒素は、適正範囲の場合は発病が少ないことから、生育初期の施肥は控え、生育後半の欠乏の回避が重要である。肥料の種類は、肥効に持続性のある緩効性肥料が望ましく施肥量は30%減らすことが可能と考えられる。

普及上の注意事項

ネギさび病は、その発病適温、形態から5～6月の育苗期にも発生し、これが伝染源となって栽培ほ場に伝搬する場合が多い。このため、さび病を回避するには、施肥改善だけでなく栽培ほ場を育苗場所と隔離し、適切な薬剤防除との組み合わせなど総合的な対策が必要である。

福嶋 昭（北部農技セ・農業部）
（問い合わせ先 電話：079-674-1230）



図1 ポットでのさび病試験

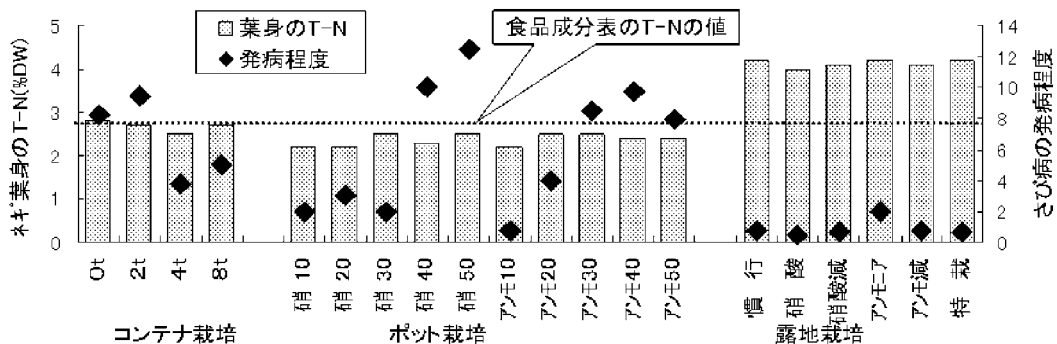


図2 収穫時のネギ葉身の全窒素含量とさび病発病程度